世田谷重症ニート殺人事件

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世田谷重症ニート殺人事件

【Ｎコード】
Ｎ４２７９Ｕ

【作者名】
由一

【あらすじ】
世田谷区のアパートでニートが刺殺体で見つかった。
犯人の正体は！？

第一話

「士郎さん！　この部屋どうですか……」

「うむ、非常にアレだな。現代っ子と言うか。」

警部である摩奈川（まながわ）　士郎（しろう）と新米刑事の遠坂　綸児（りんじ）は、遺体よりもまずその住んでいたアパートの一室を見た。

「イタイな。遺体だけに。」

「こんな時にオヤジギャグですか。」

「だって、イタイんだもん。」

そこらじゅうに散らばるエロそうな雑誌とお菓子のゴミ、二次元な女の子のポスターとアイドルのポスターで埋め尽くされた壁、色々なものが見えているフィギュア、血濡れた抱き枕、等身大のガチャピソ、口では言えないもの、アニメキャラの着ぐるみの頭部、着せ替え人形、トレーディングカード、ピンク色のガンタンク。見れば見るほどに二人とはかけ離れたアクの強い空間。そこに、素っ裸であおむけになる小太りの男の死体。顔はなぜか幸せそうにすら見えた。

「死因は、出血性ショックか。」

「そうでしょうね、心臓をチョクですから。凶器は室内には残されていませんでした。」

「むう、で、この男は？」

綸児は、手に持った書類を読む。

「名前は、坂崎（さかざき）　台三郎（だいざぶろう）３４歳、独身無職。出身は愛知県春日井市で、両親は健在。この東京に単身暮らし始めたのは、６年前だそうです。」

「なんでまた東京に来たんだ？」士郎は首を傾げる。

「おそらく、仕事探しでもしようと思ったんじゃないですか？　東京ならチャンスがある！　そう思ってくる人も少なくないでしょうから。そして、こんな風になったり鬱になったりして上手くいかない事も少なくないわけですが。」

「東京なんてそんなに良いかね？　俺はずっと住んでるけど、空気悪いし、物騒だし、ロクでもないヤツが多いし。田舎でのびのび生きてる方がよっぽど幸せだと思うがなぁ。で、犯人の目星は付いてるのか？」

「そうですね、被害者は殆ど人づきあいがなかったようです。このアパートの住人も、彼しか見たことがないって言ってましたから。」

「寂しいもんだな。」

「両親は殺害時刻には地元の愛知にいたとの事です。そのうち、ここに来ると思いますが、この部屋を見たら……何と言いますかね？」

「目を、覆いそうだな。」

士郎はそう言って、額に手を当てた。

第一話（後書き）

間違えて短編で投稿してしまっていました。スイマセン〜

こちらで続けます。

第二話（前書き）

世田谷でニートの遺体が見つかった。
刑事である士郎は、現地に向かったがあまりの惨状に目を覆った。
両親が訪れた時のショックにも目を覆った。

第二話

「お父さん～どうしたの？　そんな顔して。」

「いやな、こういうの見ていると思いだしてしまうんだよ。２日前の事件をさ。」

ＴＶに映っているのは「聖剣少女アルターリンク」という、剣を持った女の子がチャンバラをしているアニメだった。最近の深夜番組にはこう言うのもあるのかと士郎は思った。焼酎を飲みながらこんな番組を見ているのには違和感を禁じ得ない。

「なあ、鏡子。ＮＨＫに変えていいか？　確か韓流ドラマか何かがやってただろう。」

「だーめ。」

鏡子は１７にしては、しっかり者だった。母親が早くに亡くなったのもあるだろう。

勉強も運動も昔からよく出来て、今は名門お嬢様学校に通っている。

士郎は我ながら、よくできた娘だと思っていた。大人びた雰囲気さえあるそんな鏡子がこんな時間にこんなアニメを見ていたと言うのは彼にとっては意外なことだった。

「まったく、こんなもののどこが面白いんだ？」

「下手なお笑いとか韓国ドラマより面白いって。何てゆうか夢が

あるって言うか、あんまりこういうの見ない方なんだけど、良く出来てるんだよこのアニメ。ストーリーも映像も。」

確かに、3D等もふんだんに混ぜ込まれたグラフィックは美麗なものだった。

あの被害者も、こんなものを見て虚ろなる夢に身をゆだねていたのだろうか。

ニート男、坂崎（さかざき）　台三郎（だいざぶろう）殺害の容疑で真っ先に挙がったのは、アパートの隣室に住むこ大学生の永森（ながもり）　守（まもる）であった。類は友を呼ぶと言うかこれまたアニメイトなヤツで、部屋に入った士郎達は「またこんなのか」と思って呆れた。森永は大学でも「キレやすい奴」で通っていた。実際、士郎達が部屋に足を踏み入れた時は思いっきりブチ切れて印象を悪くした。事件の起こった当時も家にいたようで、いまいち明確なアリバイも無い。そして、隣室と言う事もあって、騒音などによるトラブルがあったのではないか度々の疑いも出て、上層部では、もう彼が犯人だと決めつける者もいた。

しかし、士郎にはまだ引っかかるものがあった。

「灯台もと暗し」と言う言葉もあるが、そんな簡単に決めつけられるものだろうか？

犯人が他にいるとしたら。

見たくもないアニメの画像をぼんやり見ながら士郎は思いにふけった。

第三話（前書き）

ニート男、坂崎（さかざき）　台三郎（だいざぶろう）殺害の容疑で真っ先に挙がったのは、アパートの隣室に住むこ大学生の永森（ながもり）　守（まもる）であった。しかし、士郎の刑部としての勘は安易に彼を容疑者にする事を認めなかった。

第三話

違和感。
被害者は幸せそうな死に顔をしていたのだ。
それがまず士郎には引っかかるところだった。

隣の同じような男に刃物で襲いかかられて、刺されて、果たしてこんな幸せな顔で最後が遂げられるだろうか？　そうは、思えない。あんな安らかな顔では無く断末魔の叫びの一つでも上げそうなものだ。彼にあのような死に顔をさせた人間は他にいる。士郎は長年に渡り多くの事件と被害者を見て来た。その刑事としての勘がそう彼に訴えかけるのであった。

士郎がその日、秋葉原に来たのもそう言った事情からだ。

「しかし、えらい列っすね。熱射病になっちゃいますよ～」

新米刑事の遠坂（とおさか）　綸児（りんじ）は、タオルで額をぬぐう。
警部摩奈川　士郎（まながわ　士郎）も同じだった、この炎天下で長袖カッターシャツはまずかったとちょっと後悔した。

ＪＲ秋葉原駅から徒歩５分強のところにあるそのライブハウスのような黒い建物には、ずらりと列が出来ていた。アニメのキャラクターの描いてあるＴシャツや、やたら大きいリュック、誰なのか分からないコスプレ等、皆独特の身なりの者たちがぞろぞろと一列になって建物内に吸い込まれていく。こういう状況だと逆に正装の士郎達の方が浮いてしまっていて、特に士郎は、年齢が年齢だけに列に並ぶ者達の視線がぴゅんぴゅん飛んだ。

「まったく、とんだ人気だな……被害者のお気に入りの、アイドルとやらは。」

士郎は、タバコを一本ふかした。
周囲の視線が、さらに士郎に飛んだが。彼も警部になった程の人物なので堂々たる態度だった。
むしろ気まずかったのは、吸っていない綸児の方だった。

「そ、そうですね～ＡＫＶ４８程じゃないですけど、ここまで集まるんなら大したもんです。」

「ほう、お前もＡＫＶが好きなのかえ？」

「はい、にわかファンですけどね～ＣＤはいつも買ってますよ。投票もしました。」

「それは、もうにわかでは無いと思うんだがな。日本語の使い方が間違ってるぞ。」

そうんなことを、つべこべ話しているうちに、入口は近づいて行った。

クーラーがガンガンに入っているのか、涼しい風がフワッと二人のところにも流れて来た。

第四話

「地獄を見れば～心が騒ぐ～戦いは飽きたのさ～」

「オーッ！」

会場内は音楽に合わせて歓声が上がる。

一部の人間は、ピョンピョンと飛びはね、変な踊りを踊り、黄色い点灯棒を振りまくっていた。

異様な熱気が室内に立ち込める。士郎はそれを、なかば呆然として見ていた。

「なあ、あの歌は何なんだ？　えらく渋めの曲だが……」

「ああ、あれは装甲騎兵ボトムズの＜炎のさだめ＞ですよ。８０年代のアニメの曲です。」

「お前、詳しいな。結局、お前もこいつらと同類じゃないのか？」

「否定はしませんけど～」

渋い曲を歌うのは殻倉（からくら）　あつなと言う少女だった。

被害者がファンになる事もあり、なかなかの美人でコスプレも似合っていたが、士郎は亡き妻の方が上であり、学校では「紫の薔薇のつぼみ」などと呼ばれいるらしい娘の鏡子の方が顔は上だなと思った。

「そっとしておいてくれ～明日に～ああ繋がる今日までは～」

あつなはネガティブな歌詞を元気ハツラツに歌い続ける。
周りを盛り上げる雰囲気を彼女は持っていた。
士郎はどさくさに紛れて本日１１本目のタバコをふかす。
「明日になるまではそっとしてくれ……か。まるでこれからムショにでも入る奴みたいだな」

第五話（前書き）

殻倉（からくら）　あつなのライブを見た後、士郎は……

第五話

「失礼するよ。」

警察手帳と言うものは本当に便利なものだと士郎は思った。
こうやって、人気抜群だった女の子に簡単に近づけるのだから。
どこかで、複製などした奴もいた気がする。捕まった、気がする。

「どうも、こんにちはっ刑事さん！」

楽屋にいた、コスプレ衣装では無い、殻倉（からくら）　あつなの姿は中々のおしとやかな好青年だった。ドジっ子のようなあたふたした仕草は可愛らしさを誘った。しかし、士郎にとってはやっぱり亡き妻と去年の学園祭で見事な演技をしたと言う娘の鏡子（きょうこ）の方が上であった。

「こんにちは、殻倉さん。警視庁のの摩奈川（まながわ）　士郎（しろう）と言うものです。こっちは遠坂　綸児（りんじ）。」

そう言って緊張する綸児の背中をポンと叩く。
綸児はビクッとわかり易いリアクションをとったので、あつなは面白かったのかクスクス笑った。

「くすくす……面白い方ですね。それで、刑事さん。今日のご用はなんなのですかっ？」

「ああ、ちょっとお聞きしたい事がありましてね。」

士郎は、胸ポケットから写真を取り出す。
そして、あつなによく見えるようにひらりと彼女の目の前に写真を持ってきた。

「この男と、どこかでお会いした事はありませんかな？」

「え？　いえ、知りませんけど。」

一瞬、あつなの表情が強張ったのを士郎は長年の刑事生活で身に付けた洞察眼は逃がさなかった。
知っている。何かを。

「そうですか、この男は昨日何者かに殺されましてな。あなたのファンだったようなのですが、っここで見た事は無いですかな？」

「そうですね。お客さんの中にも近寄ってくる人はいるんですが、

この人は……刑事さん？」

ギンッ。

士郎は鋭い目をして、あつなを見つめた。

餌を見つけた鷹のように。

「２６日、この被害者が死亡した当日、あなたはどこで、何をしていましたか？　殻倉さん。」

第六話（前書き）

士郎は、あつなに詰め寄る。

第六話

「そ、その日は多分、友達と遊びましたけどっ。　多分、その子達に聞けばわかると思います。刑事さん、もしかして私が犯人って疑ってるんですか？」

本気なのかリアクションなのかわからない反応をあつなは示した。

それを見て、士郎はにこやかに返答する。

「ははは、ちょっと怖がらせちゃいましたか！　つい、やってしまうんですよ。昔の癖で。」

「そ、そうなんですか……」

「いえ、被害者があなたのファンだったみたいから何かわかるかもって思ったんですよ。自宅にも購入したチケットが残ってましたし、ネットでの購入の形跡もありましたから。相当好きだったんですね～」

士郎の態度が穏やかになったので、あつなは安心したのか体の力が抜けた。

しかし、これも「抑えの士郎」と呼ばれた彼のテクニックの一つであった。

「そうみたいですね。そんな熱心なファンの人がそんな事になってしまうなんて……私にも、何か出来る事は無いでしょうか？」

「いえいえ、あなたもお忙しいでしょう？　お心だけでも彼は喜ぶと思いますよ。」

「でも……」

「殻倉さん？　どうしても、お力になりたいと言うのですか？」

「は、はい。犯人も見つかっていないようですし……お手伝いする事が出来るのなら。」

「それなら、ひとつ手伝ってもらいましょうか。少しお時間をいただきますよ。」

あつなは、まんまと士郎の言葉に乗せられたのだった。

第七話（前書き）

士郎は、殻倉あつなを被害者が殺害された自宅アパートの一室へ連れて行き……

第七話

2日後に士郎は、殻倉（からくら）　あつなを殺害現場であり被害者が住んでいたアパートの一室へと連れて行った。

入った瞬間、あつなは絶句する。

「これは……すごい部屋ですね。」

「まったく、同感ですよお嬢さん。私も、最初は言った時に思わず『痛い』って言っちゃいました。申し訳ないですね、このような部屋にお嬢さんのようなおしとやかな方を入れてしまって。」

「いえ、いいんです。少しでも、捜査のお役にたてれば。」

「そうですか、ありがたいことです。しかし、自分のポスターがこのようなところに張られているなんて、変な気分じゃあありませんか？」

あつなは、手をパーにしてささっと左右に振る。

「そんなことはありませんっ！　ファンの方にポスターを貼って

もらえるなんて、この殻倉　あつなにとっては嬉しいかぎりですぅ！」

「フフフ、全くもってアニメのような声ですなあ。」

「それで……わたしをここに連れて来た理由は一体何でしょうか？」

士郎は、棚に置かれたピンクのガンタンクに目をやる。
ガンタンクは綺麗に目消しがしてあって塗装にもムラが無かった。
キャノン砲にはエロチックなデカールが貼ってある。

「いえね。あなたがここに来てくれれば、何かインスピレーションみたいなものが浮かびそうな気がしましてね。」

「インスピレーション？」

「そう、犯人の姿が想像できると思ったのですよ。まあ、長年の勘と言うヤツです。」

「はぁ。」

あつなは、よくわからないなと言う顔をした。

第八話（前書き）

被害者の部屋を、コスプレアイドルの殻倉　あつなと調査する士郎。

果たしてヒントは得られるのだろうか？

第八話

士郎は身動きとりにくそうなあつなをよそに。
うろうろ部屋の中を歩き回った。

部屋の状況は、あの日とほとんど変わっていない。
そこらじゅうに散らばるエロそうな雑誌とお菓子のゴミ、二次元な女の子のポスターとアイドルのポスターで埋め尽くされた壁、色々なものが見えているフィギュア、血濡れた抱き枕もそのまま、等身大のガチャピソ、口では言えないもの、アニメキャラの着ぐるみの頭部、着せ替え人形、トレーディングカード、ピンク色のガンタンク。

全てを照らし合わせる。犯人と目星を付けた殻倉　あつなに対して。
士郎は以前にもこの方法をとった事がある。そして、見事に犯人を捉える事が出来た。
これは、彼の得意とする捜査手法のひとつだった。

「むっ。」

そして、何かひらめいたのか立ち止まる。
あつなが、「刑事さん、何か分かりましたか？」と彼に声をかけ

た。

「なるほどね……そういうことか。お嬢さん、ありがとうございます！　おかげで、ひとつ良い事に気がつきましたよ。」

「それは、よかったです。」

「やっぱりやってみるもんですね！　これで、犯人に一歩近づきました。」

そう言って士郎は、あつなの後ろにある物品を見る。
それは、等身大ガチャピンの人形であった。

第九話（前書き）

士郎は、等身大ガチャピンの人形を調べる。色々な形跡を発見し……

第九話

この部屋はがさつだ。
しかし、この物品は良く見てみるとこの部屋に違和感があった。
女の子とかロボットが好きな奴が、こんな等身大の子供向けテレビ番組のキャラクターを買うだろうか？　いや、買うとは思えない。
これだけ大きいと場所を取るだけだし、何より高価なものだろう。

普通に被害者が手に入れたとは言い難い代物だ。
それなら、これは何のためにどうしてここにあるのか？

犯人が殺害に利用した。
士郎はそう確信した。

本部に戻った彼は、鑑識班にこの等身大ガチャピソの人形の調査を依頼した。
すると、彼の予想通り奇妙な痕跡が発見される。

まず、このガチャピソはただの人形では無く、着ぐるみとして機能するかのような内部空間があった。
小柄な人間ならば入る事が出来る程の大きさだ。

次に、何者かの指紋。
おそらく、容疑者のものも混じっているだろう。ここから脱出する時にでもついたのかもしれない。

そして、何かの染みの様なものが内部のところどころに見られた。血では無かった。

この調査と同時に、士郎はこのガチャピソの人形が運ばれた日時を調査する。

すると、アパートの住人から情報が得られた。

等身大ガチャピソ人形がアパートに届いたのは、「事件の2日前」との事だった。2日前に、宅配業者らしき二人組が重そうにこの人形を運んで来たと言う。

士郎は、コーヒーを飲みながらこれらの情報に目を通すと、小さく笑った。

第十話（前書き）

犯人は遂に逮捕される。

第十話

「お父さん、遂に逮捕されたんだね！」

新聞を読んでいる士郎に、鏡子はかける。
新聞の紙面には事件の事が書かれていた。

＜犯人は小林　敏子（２２）＞

「ああ、そこに書いてある通りだ。」

「ふーん。」

この地味な名前では誰もピンとは来ないだろう。
この犯人は、コスプレアイドルの殻倉（からくら）　あつなの事だった。

全ては彼女が周到に仕組んだ事だったのだ。それを、彼女は全て認めた。
友人にアリバイの口裏合わせをしていたが、無駄に終わってしまった。特殊な計画犯行をたてた割に、彼女はかなりずさんな部分が

あったからだ。

「どうした？　鏡子。」

「この事件、ＴＶでやるんでしょ？　ワイドショーとかで。」

「だろうな。」

「だったら、どんなだったか教えてよ。昼間は学校だから、ＴＶみれないし。」

「いいぞ。」

「え、いいの？　さっすがお父さん心が広いね！」

そういって、鏡子は士郎を野次馬気分で見つめる。
士郎は、別に娘なら話しても構わないだろうと思った。鏡子は、家では甘えん坊でお調子者っぽいが外ではとても口が堅いのだ。家で話した事は、外に漏らさない。

「実はな、犯人は……」

新聞を下すと、士郎はタバコを一本取りだし口にくわえた。
士郎は、長話をするときはタバコをふかす癖があった。

第十一話（前書き）

犯人のトリックとは？

第十一話

犯人である殻倉(からくら)あつなの取った行動はこうだ。

まず、コスプレアイドルである彼女はそれを利用し熱狂的ファン2人を取り込んで犯行を手伝わせた。彼らは宅配員を装い被害者宅に等身大ガチャピソ人形を送り届けた。この2人は、彼女が逮捕されるとあっさり犯行を認めた。

犯人はこの時どこにいたか？　そう、等身大ガチャピソ人形の中に入っていたのだ。

先に逮捕された永森(ながもり)守のような長身では無理だが、彼女ならば十分に入る事が出来た。

士郎がアパートで気付いたのはここだった。殻倉あつなと等身大ガチャピソ人形があまりにしっくり行きすぎていたのだ。

さて、部屋に運ばれた人形に、被害者は疑問こそ持ったが、すぐにつき返す事はできずにひとまず置いておいた。欲が働いたのかもしれないがこの後のサプライズにはさぞ驚いた事だろう。なにせ、自分の好きなアイドルが人形の中から出て来たのだから。

急に人が出てきたら普通は不振がるし、長時間人形に入り続ければ熱中症になってしまうが、ここも、コスプレアイドルである事を利用して簡単に被害者の前に出る事が出来たた。「会員限定の抽選で一日デート権」が当たったと言われれば、熱狂的ファンの被害者は信じないはずもない。カワイイ女の子が側にいてくれるだけでも

舞い上がってしまっただろう。それからしばらく、被害者は出て来たアイドルと人生最後の至福の時を送った。

そして、その夜、彼が油断したすきに犯人は殺害を決行した。寝ている時に刺されたようだアイドルに看取られて絶命したのだから幸せな顔を浮かべたのだろう。

なお、近くにあった抱き枕は犯行後に移動したようだ。おそらく犯人の小工作だったのだろう。

犯行を終えると犯人はアパートの窓から、凶器と保冷剤を持って部屋を脱出した。保冷剤は人形の中にいた時に使っていたもので、人形内の染みはこれをつかっても抑えられなかった犯人の汗だったようだ。アパートの窓側は、山になっており深夜なら気付かれずに逃げるのは容易だ。柱を伝って建物を降り山に逃げ込んだのだろう。そして遠くでさっきの2人と待ち合わせ車で逃走。次の日にはもう普段の生活に戻った。

以上が、犯行の内容である。

犯人は、この犯行は上手く言ったと思ったようだが。多くの欠陥を残してしまっていた。

自分が疑われまいという犯人の気持ちが、多くのミスを残した中途半端な犯行にしてしまったのだ。

第十二話（前書き）

犯人、殻倉あつなは沢山のミスを犯していた。
そして、彼女の動機とは？

第十二話

まず、犯人は玄関のドアの鍵が開いている事に気づかずに部屋を出て言ってしまった。おかげで、たまたま訪れた第一発見者（宅配人）に扉を開けられて、遺体の発見を早めてしまった。これは、大きな誤算である。長期間遺体が放置されれば捜査は難航しただろうし、犯人が疑われる可能性も大幅に減った可能性が高い。

そして、このミスと士郎の勘の良さによって、犯人殼倉（からくら）あつなに容疑がかかるのが非常に早くなったのだが、当の本人がこれを予測していなかった。自分に捜査の手が及ぶ事は難しいと思ったのだろう、犯行時の行動にずさんな部分があった。手袋等を着用していなかったため部屋中に指紋が残っており、犯人の髪の毛まで採取された。ここまで、大きな証拠を提示されれば、友達に時間的アリバイの口裏合わせをしようとしてももう手遅れだった。

殼倉　あつなは、こうして犯行を認める事となった。

士郎は、その後彼女に殺害の動機を聞くと内容はこうだった。

犯人は、被害者坂崎台三郎（さかざきだいざぶろう）とある関係があった。

被害者が、運営していたアップローダーを利用していたのである。

このアップローダーとは、画像やデータなどをネット上に保管する銀行の様なものなのだが、犯人はここに、とても重要な見られてはいけないようなものを保管していたらしい。

しかし、このアップローダーの運営者だった被害者は、保管者がコスプレアイドル殻倉　あつなである事を知ると、そのデータを勝手に引き出して、売買等に利用したらしい。そして、謎の恐喝等にあった事でデータ漏えいに気付いた犯人は激怒、アップローダーの管理者が被害者と特定すると犯行を計画、実行に移したとのことだ。

犯人は、こう漏らした。

短絡的な犯行だった、警察に相談すべきだったと。

最終話（前書き）

話を聞いた鏡子は……

最終話

「……ふーん、勿体ないね。人気のコスプレアイドルだったんでしょ？」

「そうだな、実に勿体ない犯行をしたもんだよ。大事な人生を棒に振ってしまって。」

「そうだね。どんな画像が流出したか知らないけど、軽率だよね。」

士郎は、パックのイクラを箸でつまんで口に入れる。
そして湯で割った焼酎をそこに注ぐ。

「ああ、自他を軽率に扱いすぎだ。被害者も犯人も。鏡子もそんな事にならないように気をつけろよ？」

「かーっ！　何で飛び火するのよ？　私がその辺しっかりしてることお父さん知ってるくせに。」

土郎は、そうだなと笑った。

「でも、将来の事はちゃんと考えてるのか？　お前は、そう言うことに関しては全然父さんには言わないからな。」

「ちゃんと、考えてるよ。」

「何だ？　公務員か？」

「いや、違う。私は……」

土郎が、飲んでいた焼酎をこぼしたのは、すぐ後の事だった。

＜ＥＮＤ＞

最終話（後書き）

ここまで、読んでくれた方々には感謝です。

はじめての推理ものでした。トリックを考えるのはなかなか面白かったです。

最初は短編として投稿してしまいましたが、最後まであまり追い詰められずに書き終えることができました。

今度は、更に深みのあるものを書けたらと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4279u/

世田谷重症ニート殺人事件

2011年7月14日11時42分発行